# 第二十三講　課題作文

## Step 1

一　下のグラフA、Bは、小学校六年生と中学校三年生を対象に、平成十五年と平成二十二年に行った全国的な調査の中で、朝食について調べた結果を表したものです。

第一段落には、これら二つのグラフを見て気づいたことを書き、第二段落には、第一段落の内容をふまえて、「朝食を食べること」についてのあなたの考えや体験を書きなさい。

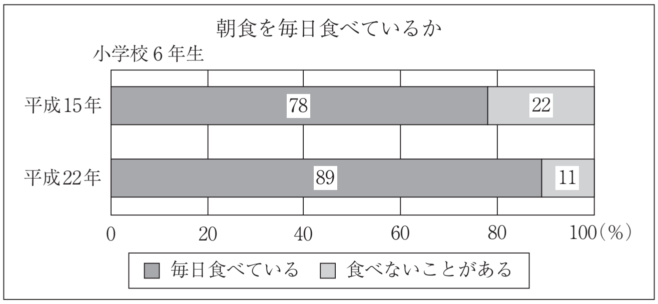
ただし、次の《注意》に従って書くこと。

《注意》

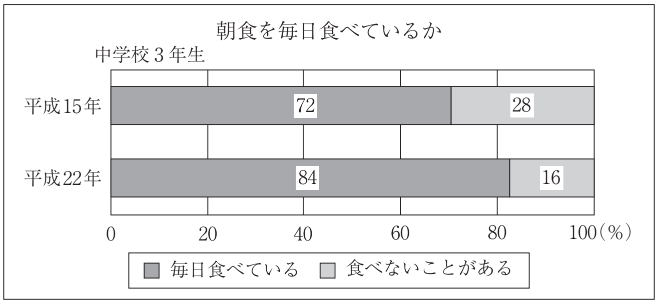
◇「題名」は書かないこと。
◇二段落構成とすること。
◇二〇〇字以上、二四〇字以内で書くこと。
◇文字は、正しく、整えて書くこと。
◇グラフの数値を使う場合は、次の例にならって書くこと。

例　三〇％　五六％

グラフA




グラフB




（「平成22年度　全国学力・学習状況調査」から作成）

【山形県】

240 200 100

## Step 2

二 現代はさまざまな面で変化の著しい時代だといわれています。そのような現代において、いつまでも変わらないでほしいとあなたが思うものは何ですか。次の条件にしたがって、あとの原稿用紙に**二百字程度**の文章を書きなさい。

題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

条件1　最初に、変わらないでほしいと思うものは何かを書くこと。

条件2　次に、なぜそれが変わらないでほしいと思うのかを書くこと。

100

【大阪府】

220
200

## Step 3

**三** 次の文章をふまえて、人と人とのつながりや出会いについてのあなたの考えを、あとの〈注意〉にしたがって書きなさい。

早起き通勤を始めると、ぼくの生活の中に「ちょっとうれしい」出会いが増えるようになりました。（中略）

まずは、守衛(注)さん。

始業時間ギリギリに行くと、守衛さんと言葉を交わすなんてまずあり得ません。でも、そこはまだ人の少ない時間帯。自然に、あいさつを交わすようになります。

すると、ぼくの気持ちに変化が起こり始めました。

いままで「守衛さん」と呼んでいたその人を、ぼくは守衛さんではなく、「ぼくの知り合いの山田（やまだ）さん」と思うようになったのです。会社の「守衛」「社員」という立場を超えて、ぼくは一個人として、山田さんを見るようになりました。山田さんも、ぼくのことを、「一社員」から「松山（まつやま）さん」と思ってくれるようになりました。

だからって、大きく何かが変わるわけではないのですが、でも着実に「ちょっとうれしい」ことなのです。

（松山真之助（しんのすけ）「30分の朝読書で人生は変わる」より。一部省略等がある。）

（注）守衛＝役所や会社などで、人の出入りを監視し、建物を警備する仕事。ここでは、その役の人。

〈注意〉

1 筆者がどんなことを「出会い」と捉えているのかを簡潔にまとめたうえで、自分の体験や見聞をまじえて書くこと。
2 解答欄の原稿用紙には「題名」や「氏名」は書かないで、本文だけを縦書きで書くこと。
3 書き出しは一マス空け、段落は変えないこと。
4 六行以上、七行以内にまとめて書くこと。

【熊本県】

7
6

# 第二十三講　課題作文

## Step 1

一　解答

（例）グラフを見ると、小学校六年生より中学校三年生の方が朝食を毎朝食べる人の割合は少ないが、どちらの学年も七年間のうちに、その割合が増えていることがわかる。

朝食を食べないと、勉強や運動に集中できないという話をよく聞く。僕自身も、寝坊して朝食を食べられなかったときに、身体に力が入らず、授業に集中できなかったことがある。その経験からも、一日にとる食事の中で最も大切なのは、やはり朝食だと思う。どんなに忙しいときでも、これからも積極的に毎日朝食を食べるように心がけたい。（236字）

## Step 2

二　解答

（例）僕がいつまでも変わらないでほしいと思うのは、友達とのつながりだ。そう思うのは、卒業が近づくにつれ、サッカー部で一緒にがんばってきたメンバーとの別れがとても惜しまれるからだ。彼らとは、朝と放課後の厳しい練習でお互いを励まし合ったり、試合で悔しさやうれしさを共有したりしてきた。進学先がばらばらなので、これからはなかなか会えなくなるだろう。でも、部活動での思い出とそこで築かれたつながりを、これからも大切にしていきたいと思う。（212字）

Step 3

三

解答

（例）筆者は、守衛と一社員の関係にすぎなかった相手を、自分の知り合いとして見られるようになったことを、うれしい出会いと捉えている。私は、学校で顔を知っていても話したことのない人も多いが、テニス部で出会い、練習に励んできた仲間とは、強いつながりを感じるようになった。喜びも苦しみも共に味わってきたこの仲間との出会いは、中学時代に得た大きな宝物である。（7行）

解説

筆者が、「守衛さん」と呼んでいた人を、「ぼくの知り合いの山田さん」というように個人として見られるようになったことを、「出会い」と捉えていることをおさえる。